

Staff Awareness Concerning about English
Activities in Pre-schools : Through an Interview
Survey

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2021-02-22 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 五十嵐, 淳子 メールアドレス: 所属:
URL	https://saigaku.repo.nii.ac.jp/records/1353

This work is licensed under a Creative Commons
Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0
International License.



幼児英語教室における英語教育に関する意識調査

— インタビュー調査を通して —

Staff Awareness Concerning about English Activities in Pre-schools

Through an Interview Survey

五十嵐 淳 子

IGARASHI, Junko

本研究では、幼児英語教室と幼稚園や保育園の英語活動の取り組みについて共通点と相違点が明確化された。英語活動の子どもの様子については、楽しんで参加していることは共通点として挙げられるが、幼児英語教室の場合は教室全体が英語環境であるため、英語活動の参加については子どもの主体性に委ねられている点が相違点であることがわかった。幼児英語教室は英語の環境の中で子どもが興味のあることや好きな遊びをしながら過ごすことのできる場所であり、英語で遊ぶことができていることは大きな相違点であることが明らかになった。また、幼児英語教室の特徴としては、英語活動の担当者と補助の担当者間で計画や準備、振り返り等も含めて、英語活動の前後に話し合いが行われていることが明らかになった。

1. はじめに

英語教育において、2011年から小学校で英語活動が行われるようになり、2020年までに公立小学校で「英語」が正式教科として導入される背景から、幼稚園や保育園でも英語活動を導入している園が増加している。幼児教育や保育における英語教育を対象とした研究では、秀ら（2013）は幼児教育において英語教室が広まっており、英語教育の要望は増加傾向であることを示している。松永・小松・ルーク（2009）は幼稚園や保育園での約7割が英語教育を導入していることを明らかにし

ている。幼児の英語活動において、山内(1999)は幼児期の英語教育に期待することに外国人と接する楽しさについて言及しており、外国人と英語を使って触れ合う時間は国際社会を生きていく子どもに有益であることを示唆している。

内藤・野本（2017）は幼児教育の英語活動に携わる教師や保育者の指導力を向上させるための体制整備の必要性を提言している。柳・高橋（2015）は幼児教育専攻学生の英語学習に対する意識調査から保育者を志す学生の基礎的な英語力の重要性を示唆している。幼児教育における英語教育においては、幼稚園や

キーワード：英語教育、英語活動、教材

Key words : english education, english activities, teaching materials

保育園の環境だけでなく英語教師や保育者が幼児に与える影響が大きいことが言える。また、幼稚園や保育園だけでなく幼児を対象とした民間の英語教室も増加傾向が見られることから、幼児期の英語教育のニーズが求められている状況である。

しかし、先行研究からは民間の幼児英語教室の英語教育に関する研究は行われていないことが明らかになった。幼児教育や保育現場の英語教育の実状をより一層把握していくためには、幼稚園や保育園だけでなく、民間の幼児英語教室等の現状も把握していく必要性を感じた。そこで、本研究は未就学者に対して英語教育を行っている幼児英語教室の職員へのインタビュー調査を基に、幼児英語教室での英語教育がどのような意識で取り組まれているのかを明らかにすることを目的とする。

2. 研究方法

本調査は筆者が英語教育の観察を行った幼児英語教室の職員に対して、管理職、主担当の職員、補助の職員のそれぞれにインタビュー調査を行った。インタビュー調査においては、事前に本研究に基づく趣旨説明を行い、本研究に必要な情報開示、資料提示について協力の同意を得ている。調査内容については以下のとおりである。

2.1 調査場所

首都圏の幼児英語教室（2校）で調査を実施した。幼児英語教室の抽出については、筆者が実際にフィールドワーク研究として英語活動の観察を実施した幼児英語教室において、インタビュー調査に協力いただける承認を得て依頼した。

2.1.1 幼児英語教室について

本調査を実施した幼児英語教室2校は、首都圏を中心に開校されている民間の英語教室であり、系列が同じ教室である。幼児の英語教室では、2歳児と3歳児クラスをpre-school（プリスクール）、4歳児と5歳児クラスをpre-advanced school（プリアドバンススクール）として開講されている。職員は英語母語話者の外国人もしくは日本人である。

2歳児・3歳児クラスの定員は10名であり、3歳児クラスはまだ幼稚園に通園していない子どもを対象としているため、10時30分～14時30分までの1日4時間で開室されている。保護者が負担する費用としては、入会金が2万円で週1回であれば月謝は21,000円、週2回は36,000円、週3回は48,000円、週4回は60,000円となる。教材費は半年分で6,000円となっている。

4歳児と5歳児クラスは幼稚園が終わってから幼児英語教室に通う子どもを対象としているため、週2回開講しており、週1回か週2回か選択することができ、15時30分～17時30分の2時間で行われている。4歳児・5歳児クラスの費用については、入会金が10,000円、教材費が半年分で6,000円、月謝は週1回であれば14,000円で週2回であれば、23,000円である。各クラスとも職員が子ども一人ひとりに接することができる環境が整備されており、手厚い教育が行われている印象を受けた。

2.2 調査時期と調査対象

調査時期は2019年3月18日に実施した。調査対象は、幼児英語教室の職員で合計9名である。職員の内訳としては、管理職（日本人2名の合計2名）、主担当職員（英語母語者

2名、日本人1名、合計3名)、補助職員(日本人3名、英語母語教師1名、合計4名)である。

2.3 倫理的配慮

調査目的、調査内容、データの処理方法、調査結果の使用およびプライバシーの保護については、口頭にて説明するとともに書面に明記した。さらに、本調査への参加は自由であり、回答によって一切の不利益を被ることがないことを説明した。以上の内容に理解を得られた者に対して調査を実施した。

2.4 調査方法

調査方法は半構造化インタビューの形態のインタビュー調査を実施した。インタビュー時間は1人あたり10分程度として行った。幼児英語教室の運営にあたっている管理職のインタビュー項目は、①このスクールではどのようなことを目的として子ども達に英語を教えているのか、②英語活動の実施形態について、③英語活動はどのくらいの頻度で行っているのか、④スクールごとに実施状況や内容などは違うのか、⑤英語活動での子どもの様子等、保護者に伝えていることはあるか、⑥今後の英語活動に向けて、改善していきたいこと等はあるかの6項目について質問した。

英語教室のクラスの主担当職員のインタビューについては、①このスクールで英語活動を担当してどのくらいか、②今日の英語活動では子ども達はどうかだったか、③今日の英語活動のねらいについて、④今日の英語活動のねらいは達成できたのかどうか、⑤ここではどのような英語活動を行っているか、⑥どのような英語教材を使用しているか、⑦子ども達に一番人気があるアクティビティーは何

か、⑧子どもに英語を教える際に特に意識していることはあるか、⑨英語活動を通してどのようなことを子ども達に身につけてほしいか、⑩このスクールで子どもに英語を教えることについてどのようなことを思っているかについての10項目について質問し、英語教師のインタビューに関しては、日本語と英語の両方でインタビューが行えるよう配慮した。

英語教室のクラス補助担当職員のインタビューについては、①こちらのスクールでの英語活動の補助はどのような役割があり、補助の仕事には実際はどのようなことがあるか、②本日の英語活動では子ども達の様子はどうかだったか、③実際の英語活動に参加されてどのように感じているか、④子ども達の英語活動を補助する時に特に気をつけていることや意識していることはあるか、⑤英語担当者の方との打ち合わせなどコミュニケーションはどのようにしているか、⑥英語活動の補助として教室に入ることはどのように思っているか、⑦子どもの英語活動は補助ではなく担当者として行ってみたいか、⑧こちらのスクールでの英語活動や子どもが英語に触れることについてどのようなことを思っているか、⑨その他の意見についての9項目について質問し、英語教師のインタビューに関しては、日本語と英語の両方でインタビューが行えるよう配慮した。

2.5 分析方法

質問項目の回答において分類する必要性がある事項については、英語教育の実践研究で使用される質的研究の手法で、ゾルダン(2006)、高木(2016)、藤田(2019)が示しているコーディングとカテゴリー化でデータを整理した。インタビュー調査内容の逐

語録を作成し、データーにコードを付け、コードを集めてカテゴリー化する方法を行った。

3. 調査結果及び考察

3.1 幼児英語教室の管理職のインタビュー結果及び考察

管理職のインタビューにおいては2教室の管理職それぞれ1名で計2名のインタビューを行った。このスクールではどのようなことを目的として子ども達に英語を教えているのかということについては、「楽しい」「外国人」の2つのカテゴリーに分類することができた。幼児英語教室では、基本的には会話ややりとりは英語のみで行われており、幼稚園や保育園の英語活動と違うことは、保育時間や課外時間で英語を学習する時間が設定されているのではなく、英語教室で過ごす時間の全てが英語活動になっていることである。管理職のインタビューからは子どもが遊びの中で英語は「楽しい」という感覚を身に着けていくことを望んでいることが明らかになった。また、「外国人」のカテゴリーでは、英語母語話者の外国人教師と触れ合うことにより、「外国人」の存在に気付き、「外国人」との交流に抵抗感がなく臆さずコミュニケーションを取れることを目的にしていることが明らかになった。

英語活動の実施形態については、各クラスとも主担当職員は1名でやり取りは全て英語で行っている。補助職員は各クラス2～3名では英語による声かけを中心とするが、子どもが理解できていない際や場合によって日本語による補助も行うことがわかった。教師では、ワークタイム（自由に遊ぶ探求の時間）、サークルタイム（自己紹介、気分、月、曜日、天気）、ミュージック&ムーブメント（英語の

音楽でのダンス）、ドラマチックプレイ（ごっこ遊び）、アート&クラフト（お絵描き、工作）のプログラムが提供されている。アウトプットはサークルタイムの自己紹介以外は求めておらず、子どもがプログラムに参加するかどうかは個々の自由であり、遊びに夢中になっていたり、違うことに興味があったりして、参加しない子どもには、職員は参加を促すような声かけは行うが決して参加を強制することはしていないこともわかった。

英語活動はどのくらいの頻度で行っているのかという質問については、2歳児と3歳児クラスは1日4時間で4歳児と5歳児クラスは1日2時間で開校されている。子どもが週1回の割合で通っているのが全体の7割を占めており、週2回以上は3割であることがわかった。スクールごとに実施状況や内容などは違いについては、アメリカのクリエイティブカリキュラムに準拠したプログラムが本部から送られ、それを各クラスの職員が準備するので、材質や色などのアレンジで個性は出るが、相対的には教室が違う場合も同じ内容となっているとの回答であった。

英語活動での子どもの様子等、保護者に伝えていることはあるかという質問については、子どもの具合が悪くなったり、何かアクシデントが起きたりする時はすぐに保護者に連絡をするという回答が得られた。しかし、子どもの英語については、教室のプログラム内容は伝えるが特に子どもの英語力の変容については一切伝えていないということであった。その代わりに、例えば、苦手なものを克服できたことや挑戦したことなど子どもの内面の変化については伝えるようにしているということであった。Cameron(2005)は、保護者の「要求」を考慮に入れなければならないと言及し

ており、学校が教えることで強化している学習理論について保護者に知らせたり教育したりする責任もあることを示唆している。英語教室は学校ではないが、例えば、英語の発話が増えたり、聞き取る力が見られたり等、幼児英語教室での子どもの様子についての報告は保護者に伝えることが必要であると考え。

今後の英語活動に向け改善していきたいことについては、教材の工夫で英語のみで日本語の補助がいない環境にしたい、家庭での英語活動を促す提案と集客、主担当職員の質の向上の3点が挙げられた。家庭での英語活動を促すことで、相乗効果を生ませることで子どもの英語力が伸びていくことで集客にも繋がることや教室での日本語の補助が必要ない状況にもなることを考えていることがわかった。また、主担当職員の質の向上については、職員間で教育の差がないようにしたいという思いがうかがえた。

3.2 主担当の職員インタビュー調査結果及び考察

英語教室のクラスの主担当職員のインタビューについては、英語母語者2名、日本人1名、計3名のインタビューを行った。このスクールで英語活動を担当してどのくらいかという質問については、5ヵ月、6ヵ月、7ヵ月という回答であり、担当者の経験数としては浅いことがわかった。

今日の英語活動では子ども達はどうかという質問についての回答は、「集中」「発話」「参加」という3つのカテゴリーに分類した。今日の英語活動のねらいについて全員が「発話が増える」ということを挙げた。今日の英語活動のねらいは達成できたのかどうかは、達成できたと回答しており、達成でき

たと回答した理由としては「準備したアクティビティーを子ども達が楽しんだように見えた」「英語を学ぶ間楽しい経験ができたことが一番良かった」などの回答があった。ねらいの達成については、評価はあくまでも担当者の主観であり客観的評価に基づいて行われていることはなかった。この教室ではカリキュラムについては共有できるようになっているが、評価については明確な規定がなく、各クラスの主担当者の主観に基づいていることが明らかになった。

ここではどのような英語活動を行っているかという質問に対しては、ロールプレイ、ワークタイム、絵本、読み聞かせ、挨拶、天気、音楽という回答が挙げられた。どのような英語教材を使用しているかという質問に対しては、絵本、プリント教材、絵カード、本物に触れる、音源という回答が挙げられた。また、教材については、スクールカリキュラムで示された教材以外にも各担当者がインターネットで魅力的な教材を探して準備していることもわかった。子ども達に一番人気があるアクティビティーについては、読み聞かせ、音楽と体を動かす、運動、粘土、工作、ボールゲームという回答であった。

子どもに英語を教える際に特に意識していることはあるかという質問については、「楽しい」と「言葉」の2つのカテゴリーに分類した。「楽しい」については、英語教室で過ごす時間が長いので、子どもが「楽しい」と思うようなアクティビティーを準備することに力を注いでいることがわかった。「言葉」については、日本語を話さないようにすることや英語を強要しないようにする、言葉遣いに気をつけるなどの意見が出ていた。

Pinter (2017) は、教師が子ども達のため

に言葉を楽しみ、言語と一緒に経験することで、子どもの第二言語習得を励ますことができることを示している。また、Curtain & Dahlberg. (2015) は、教室の第二言語習得を励ますためにはコミュニケーションを強調することについて言及しており、教師は生徒にコミュニケーションの楽しさや生徒が言語理解できるような、言語と関係ある情報を伝達事項として囲むような環境を提供することを示唆している。幼児英語教室の職員は日本語をあまり話せない職員もいるが、基本的には英語と日本語の両方が話せるため、言葉を発するとき英語と日本語の両方が入り混じる話し方をしないようにすることや英語が理解できない子どもに対して、すぐに日本語に訳すのではなく、簡単な英語で言い直すことやジェスチャーを使うなどの工夫をしながら、できるだけ英語のみの環境で過ごすことが苦痛にならないように考慮していることがわかった。

幼稚園と保育園においても英語教師に同様の質問をしたが、「楽しい」というカテゴリーについては「英語を楽しんでもらう」ことをコード化し、幼稚園、保育園、幼児英語教室の全てにおいて共通していることが明らかになった。また、「言葉」のカテゴリーは幼稚園と保育園とは全く違う結果となった。保育園では、「表情」や「抑揚」というカテゴリーには分けられたが「言葉」というカテゴリーについては保育園や幼稚園では見られなかった。

英語活動を通してどのようなことを子ども達に身につけてほしいかという質問の回答については、「英語」「感謝」「あきらめない」の3つのカテゴリーに分類した。英語力を身につけるだけでなく、「英語」を通して感謝することやあきらめないことを身につけてほしい、

道を開いてほしいという気持ちが表れていることがわかった。このスクールで子どもに英語を教えることについてどのようなことを思っているかについては、「成長」「楽しい」「理解」の3つのカテゴリーに分けることができた。「成長」については、「子どもの成長だけでなく自分自身も成長させてくれる」ことをコード化した。「楽しい」ということについては、「仕事が楽しい」ということ、「理解」については「職員同士の理解がある」ことをコード化した。幼児英語教室の職員は幼稚園や保育園と違い、仕事の範囲が多岐に渡ることなく英語を教えることだけに特化されている。また、残業などは一切なく、職員の勤務時間が明確になっていることから、日本の職場に見られるような勤務時間が過ぎても帰りづらいというような雰囲気は一切なく、勤務しやすい環境が整備されていることが背景に挙げられるだろう。幼児英語教室では指導時間が区切られているため、一日の中で職員同士の話し合いをする時間も効率的にとることができ、職員同士のコミュニケーションが円滑に回れているということがわかった。

3.3 補助担当の職員インタビュー調査結果及び考察

英語教室のクラス補助担当職員のインタビューは、日本人職員3名、英語母語話者（英語・日本語・フランス語・ガーナ語の4か国語を話す）の外国人職員1名の計4名に行った。こちらのスクールでの英語活動の補助はどのような役割があり、補助の仕事には実際はどのようなことがあるかという質問については、「声かけ」、「援助」、「準備」の3つのカテゴリーに分類できた。幼稚園と保育園でも同様の内容のインタビューを行ったが、この「声

がけ」と「援助」の2つのカテゴリーは重なっており、幼児英語教室でも保育園でも補助の役割は共通していることが明らかになった。英語を理解できない子どもに「援助」することだけでなく、特に2歳児クラスや3歳児クラスの担当補助職員は子どもが排泄をする時の「援助」も含まれていることがわかった。3つ目のカテゴリーである「準備」については、幼稚園と保育園との相違点であることが明らかになった。補助の役割として、「準備」としては教材やカリキュラム作成、環境の準備について回答している。幼稚園や保育園では、英語活動に保育者が参加しているが、事前の準備や打ち合わせなどは一切しておらず、この点においては、幼児英語教室と明らかに相違があることがわかった。

次に今日の英語活動では子ども達の様子はどうだったかという質問については、「のびのび」と「自由」の2つのカテゴリーに分類できた。幼稚園と保育園では同様の質問であったが、大きな違いが表れた結果となった。幼稚園や保育園の英語活動は、英語の時間に区切られる時間となっているため、全員が参加することが当たり前になっている。一方、幼児英語教室では、幼稚園や保育園のように一日の生活する時間の中で英語活動の時間が限定されているものではない。子ども達が教室で過ごす時間の全てが英語で過ごす時間となるため、アクティビティーについても参加を強要されることなく「自由」であり、個々の子どもが興味を持って遊びたいことを「のびのび」できる環境であることがわかった。

実際の英語活動に参加されてどのように感じているかという質問については、「楽しい」「向かう」の2つのカテゴリーに分類した。1つ目の「楽しい」というカテゴリーについ

ては、幼児英語教室、幼稚園と保育園の英語活動の全てに共通していることが確認できた。2つ目の「向かう」というカテゴリーについては幼児英語教室だけに見られることがわかった。子どもが英語に臆することなく向かっていくことや純粋な気持ちで向かっていく姿から補助職員が勇気づけられることや、職員自身も英語をもっと勉強して理解を深めたいという気持ちになっていることがうかがえた。

子ども達の英語活動を補助する時に特に気をつけていることや意識していることはあるかという質問についての回答から、「英語」と「安全」の2つのカテゴリーに分類した。「英語」のカテゴリーでは「英語で話しかける」ということをコード化した。職員は英語と日本語の両方を話すことができるため、理解できない子どもに対してはどうしても日本語で対応しがちであることがわかった。そのため「英語」で話すことを意識していることが明らかになった。2つ目の「安全」のカテゴリーでは、教室内の事故が起きないように意識して「安全」に気を配っていることが確認できた。

英語担当者の方との打ち合わせなどコミュニケーションはどのようにしているかについては、毎日打ち合わせができていることがわかった。また、毎週話し合いをしながら子どもにあったアクティビティーを考えてカリキュラム作成をすることもあげられた。また、職員間で問題点や良かったことなどを共有することや早めに伝えるという意識も強くあることがわかった。Shin (2014) は教師が子どもの興味や想像力や好奇心を教室で維持し続ける必要性を提唱している。教師が教室や活動的で創造的な課外活動や実践的なアクティ

ビティーを立案する際に、興味深くかつ実際の価値を持つかを結びつけなければならぬことを示唆している。幼児英語教室では、仕事内容が「英語」ということに特化していることから、職員全体で英語のアクティビティーやカリキュラムを考える姿勢が見受けられた。この点においては、幼児英語教室と幼稚園、保育園とは明らかに違うところである。

しかし、英語活動に取り組んでいる幼稚園や保育園では、保育者の多忙さから英語教師だけでなく保育者同士でさえも英語活動において打ち合わせをする時間がほとんどないことが問題点としてあげられるだろう。保育園では書類を通して英語活動の内容を確認できる園もあったが、英語活動の枠だけでなく、保育者の職場環境については今後の必要な課題として早急に改善していきなければならないことである。

英語活動の補助として教室に入ることはどのように思っているかということについては、「楽しい」、「やりがい」の2つのカテゴリーに分類した。保育園では保育者に英語活動に参加することをどのように感じているかという質問回答のカテゴリーでは「楽しい」があげられており、その部分は共通項が見られた。幼稚園や保育園の保育者が英語活動を補助として参加することは仕事の役割の一部であるが、幼児英語教室の補助職員は、補助として教室に入ることが仕事の全てを占めているため、仕事に「やりがい」を感じている傾向が強くなることがわかった。

子どもの英語活動は補助ではなく担当者として行ってみたいかという質問については、4人中2人は「思わない」と回答しており、1人は「思う」と回答し、1人は「興味はあるが難しい」と回答しており、それぞれ意見

が異なることがわかった。「思わない」と回答した職員は日本人であり、理由としては、主担当職員は英語母語話者が望ましいと考えていることがわかった。「思う」と回答した人は英語母語話者の外国人であり、主担当職員として活躍していきたいという気持ちが表れていた。また、「興味があるが難しい」と回答した職員は家庭との両立が難しくなることを危惧しており、主担当職員になると仕事の責任や分量が増えることから、やりたい気持ちはあるが実際には困難であるという背景がわかった。

こちらのスクールでの英語活動や子どもが英語に触れることについてどのようなことを思っているかという質問についての回答としては、「良い」「素晴らしい」「羨ましい」の3つのカテゴリーに分類した。保育園の調査では1つ目の「良い」というカテゴリーがあがっており共通部分であることがわかったが、幼児英語教室で挙げられた「良い」というカテゴリーにおいては、英語を学ぶことでなく、英語で学ぶ雰囲気が良いという思いも含まれており、その点においては保育園の保育者の気持ちと相違点が見られた。2つ目の「素晴らしい」のカテゴリーでは、早い段階から英語に触れることができることに「素晴らしい」と感じていることや、英語を通して家族以外の人々に触れることは社会を知る第一歩となることが「素晴らしい」ことだと考えていることがうかがえた。3つ目の「羨ましい」については、幼い時から英語に触れる機会があることは「羨ましい」と考えていることがわかった。また、その他の意見については、「幼児英語教室がもっと広がってほしい」との意見がでた。インタビュー結果からは、補助職員全員が幼児英語教室の英語教育を肯定的に

捉えていることが明らかになった。

4. おわりに

本研究を通して、幼児英語教室における英語教育の取り組みについて明らかになったのと同時に幼稚園や保育園の英語活動の取り組みについて共通点と相違点のそれぞれが明確化された。大きな共通点の一つとして管理職の意識があげられる。幼児英語教室の管理職の意識については、幼稚園や保育園の管理職が英語活動を導入している目的とほとんど差異がないことがわかった。保育園の調査でも外国人の存在を知ることや外国人や英語に対する抵抗感をなくすことがあげられており、幼児英語教室でも英語母語話者の外国人教師と触れ合うことにより、外国人の存在に気づき、外国人との交流に抵抗感がなく臆さずコミュニケーションを取れることを目的としていることから、管理職の意識は共通していることが明らかになった。

次に、幼児英語教室の主担当職員が行う英語活動の内容や使用教材についても、幼稚園や保育園で英語活動を担当する英語教師が扱うものと多くの共通点が見られた。使用されている英語活動や英語教材は独自性の強いものもあるが、基本的には幼稚園や保育園の英語活動や使用されている英語教材と共通しているものが多く、この点においても共通点としてあげられる。英語活動の内容としては、アクティビティーやTPR（全身反応教授法）、体を動かすことや歌等が取り入れられていた。英語教材としては絵カードや歌等の音源教材も共通点が多いことが確認できた。

一方、大きな相違点としては、英語活動の担当者と補助の担当者のコミュニケーションの点が挙げられる。幼稚園や保育園で勤務す

る保育者においては、職員の人数や職場環境にも余裕がない状況が見受けられ、英語担当者と補助の役割を担う保育者との打ち合わせは行われていない。しかし、幼児英語教室では、日々の打ち合わせが徹底されており、計画や準備、振り返り等も含めて、英語活動の前後にコミュニケーションが行われていることが明らかになった。

また、英語活動の子どもの様子については、楽しんで参加していることは共通点として挙げられるが、幼児英語教室の場合は教室全体が英語環境であるため、英語活動の参加については子どもの主体性に委ねられている点も相違点であることがわかった。幼児英語教室では、幼稚園や保育園のように英語活動の時間が区切られていないため、英語活動の限られた時間で英語を学ぶのではなく、英語の環境の中で子どもが興味のあることや好きな遊びをしながら過ごすことのできる場所である、つまり、英語で遊ぶことができていることは大きな相違点であることを改めて感じた。

今後は課題としては、幼児英語教室においても幼稚園や保育園の英語活動においても評価の問題があげられるだろう。英語活動のねらいに対して達成できたかどうか、どれくらい達成できたかについては、英語活動の担当者の主観的な評価であり、評価方法が整備されていない現状が明らかになった。就学前教育ではポートフォリオ評価などは取り入れやすい評価方法の一つだと言えるが、さらに英語活動を充実するためには、評価方法を見直し改善していくことが必要であると考え。今後は、保護者の意識調査を行い、就学前教育の英語教育のあり方をさらに模索していきたい。

引用文献

- Cameron, L. (2005). *Teaching Languages to Young Learners*: Cambridge University Press. p.221
- Curtain, H. & Dahlberg, C.A. (2015). *Languages and children-making the match(5th)*.
World Language Instruction in K-8 Classrooms and Beyond.: Pearson Education. p.4
- Pinter, A. (2017). *Teaching young Language Learners Second Edition.*: Oxford University Press.p.27
- Shin, J.K. (2014) Teaching Young Learners in English as a Second /Foreign Language Setting.
Celce-Murcia, M., Brinton, D.M. & Snow, M.A. *Teaching English as a Second or Foreign Language (3rd eds.)*: National Geographic Learning/ Heinle Cengage Learning. p.551-564
- 五十嵐淳子 (2020) 「保育園の英語活動に対する管理職・保育者及び英語教師の意識—インタビュー調査を通して—」名古屋学院大学大学院外国語学論集第20号, p.1-16
- 厚生労働省 (2018) 『保育所保育指針解説書』フレール館.
- 秀真一郎・木本有香・中島眞吾・鳥田直哉・小野克志・志濃原亜美・横井一之・田中卓也 (2013) 「幼児教育現場における英語活動の実態とその方向性」吉備国際大学研究紀要第23号, p.21-28.
- ゾルタン・ドルニェイ監訳八島智子・竹内理 (2006) 『外国語教育学のための質問紙調査入門作成・実施・データ処理』松柏社. pp.135-137
- 高木亜希子 (2016) 「質的研究の進め方」浦野研・亘理陽一・田中武夫・藤田卓郎・高木亜希子・酒井英樹『はじめての英語教育研究』研究社.
- 内藤徹・野本尚美 (2017) 「早期英語教育の現在」仁愛女子短期大学研究紀要49号, p.15-21.
- 藤田卓郎 (2019) 「データを分析しよう」田中武夫・高木亜希子・藤田卓郎・滝沢雄一・酒井英樹『英語教師のための実践的ガイドブック』大修館書店.
- 松永道子・小松義隆・ルークロバージュ (2009) 「コミュニケーション能力を高める幼児英語教育のこれから～認定こども園・保育園における英語教育の全国調査および先進園訪問を通して～」『長崎短期大学研究紀要』21号, p.47-62.
- 文部科学省 (2018) 『幼稚園教育要領解説』フレール館.
- 柳善和・高橋美由紀 (2015) 「幼児教育学科の学生能力と英語学習に対する意識について」『中部地区英語教育学会紀要』44巻, p.183-190.
- 山内圭 (1999) 「幼稚園・保育園での英語教育の取り組みについて (1)」新見公立短期大学紀要第20号, p.183-198.